

## 新渡戸稲造と道歌（その一）

近 藤 眞 弓

### 序

新渡戸稲造（一八六二—一九三三）は『武士道』の著者として、また「太平洋のかけ橋」として活躍した人物として高い評価を得ているが、彼は多くの雑誌に主に青少年を対象とした啓蒙的文章を掲載し続けることによって、社会教育・生涯教育の分野でも大きな業績を残している。

本稿では、特に新渡戸が編集顧問を引き受け、その晩年まで精力的に文章を投稿し続けた雑誌「実業之日本」を取り上げ、そこで新渡戸がいかなる手法で青年達に教育を行ったのか、またその膨大な数の文章を通して新渡戸が青年達に伝えたかったことはいかなることであったのか、大きくこの二点について、新渡戸の文章に夥しく登場する和歌に焦点をあてて考察していくこととする。

### 一

新渡戸はいわゆる修養書を多数出版しているが、雑誌「実業之日本」に掲載された文章をまとめて単行本として出版された修養書は次のとおりである。『修養』（実業之日本社、一九一一年）、『世渡りの道』（実業之日本社、一九一二年）、『自警』（実業之日本社、一九一六年、後に『自警録』と改題）、『人生読本』（実業之日本社、一九三四年、新渡戸の没後出版）の四冊であるが、これらに加えて、続篇ともいえるべき著

作として『二日一言』（実業之日本社、一九一五年）が出版されている。

これらの修養書は当時のベストセラーとなり多くの読者を獲得した。『修養』を例に挙げると、明治四十四（一九一一年）の初版から昭和九（一九三四年）年までに一四八版を重ねたロングセラーとなっている<sup>1)</sup>。このように多くの読者を獲得した要因の一つには、何といつても文章が非常に平易で誰にでも理解することができたという点が挙げられるであろう。新渡戸自身、「余は何故実業之日本社の編集顧問となるか」において、

「中学を半途退学したり又は中学の教育さへも受けられなかった人々を教育し、その観念を改めさせることは今日最も必要なことと思ふ。今日の社会には学校も階級的に設けられ、青年教育の途が普及しているが、惜しいかな学校以外には教育を授ける機関がない。学問を修めることの出来なかつた人に学識と徳藻とを涵養させる機関がない。又一家を離れ不幸の淵に沈んで居る人を慰安する設備も欠け、不幸の人は愈々不幸に陥るのみである。明治の聖世、万物の整備して居る今日、この欠点あるは僕の甚だ遺憾とする所である。

・・・

此等の人々に対し学校以外で教育を与へる設備か機関がなければ、それは実に危険である。……僕が今回顧問となつたのも、この雑誌を通して、学問のない人に学問を与へ、煩悶して居る人に、慰安を与へたいといふ事が第一の理由である。」（全集別巻一、六八二頁—六八三頁）

として、そのために、

「卑近なことで何人の目にも入り易いことを説き、そして其中に高尚な原理から応用されたことを説くのは甚だ必要のことと思ふ。

『実業之日本』は高尚なことを説かないで、卑近な何人にも解り易く、又何人も知なければならぬことを説いて居る。恰度今述べた所と相一致して居るのではないか。」（全集別巻一、六八五頁）

と述べている。また『修養』の序文においては、

「初から可成通俗を旨とし、車挽く人、柴刈る野の人にも、尚解し得る程度に話したいと思直しては、込入ったことを省き、専ら平易を主とし、浅く平たく綴ったのである。」（全集七巻八頁）

とあるように、平易な文章で全篇通している。  
右引用文のように、新渡戸が前提とした読者層は、学校教育を受けたくとも受けられない、特に上級の学校に進学することを許されない状況に置かれていた、当時の大多数を占めた働く青少年達であった。当時の知識階級に属する人々は手に取らないような「通俗的」雑誌に、平易で通俗的な文章を掲載し続けた新渡戸は、同僚等内部からかなり厳しい非難を浴びている。特に実業之日本誌顧問となった明治四十二（一九〇九）年当時は、東京帝国大学教授と第一高等学校長を兼任しており、そのような立場の人間があまりにも通俗的な文章を書くことに對して、

「折々友人からも、談話の余りに通俗平易に流るゝことは、自分の位地職務等に対して感心せぬ、も少し趣をつけたらよかろうと、忠告を受けたこともないではない。」（全集七巻八頁）

と新渡戸も記している。このような逆風の中、何故新渡戸は通俗的文章による青少年教育を続けたのであろうか。

その理由の一つは、前述したように、明治政府の導入した学校教育制度への危惧の念があったと考えられる。西洋から導入した近代的な学校教育制度そのものを新渡戸は決して否定していないが、「惜しいかな学校以外には教育を授ける機関がない」（同上）と、当時の学校教育

制度を暗に批判している。近代的学校教育制度を確立し国力を上げる

ことに力を注いでいた明治政府は、他方で前の時代の教育のあり方をすべて捨て去ってしまうという極端な政策を採っていた。正規の学校教育を受けることのできない人には、いかなる学びの場も機会も与えられないという、硬直化した学歴至上主義の萌芽に対する新渡戸の危機感は小さくなくあったと思われる。また、新渡戸には「前時代は良かった」というような懐古趣味はなかったが、教育に関しては前時代の教育に捨て去り難い思いを持っていたのではないか。「学問を修めることの出来なかつた人に学識と徳藻とを涵養させる機関がない」（前掲）と述べているが、ここには、前時代には用意されていた、寺子屋を含む私塾のような教育機関や個人と個人の間で師弟関係を結ぶ教育のあり方、寺院での僧侶による教育等、多彩な、しかも各々の立場に応じた教育の場が失われてしまったことに對する新渡戸の無念さが込められているように思われる。

新渡戸は札幌農学校や第一高等学校に在職中、休みの日には学生・生徒をよく自宅に招いて親しく交流することに心を砕いていた。これは、近代的学校教育制度による教育だけでは困難な、師が弟子に及ぼす人格的感化、人格が人格を磨き上げていくという、前時代においてはあまりにも一般的な教育のあり方を補うために、新渡戸がかなり意図的に行っていた教育方法ではなかったか、と思われる。このような人格的感化による教育の場が失われたことに對し、その補完となすべく「正規の学校以外のもう一つの教育の場」として雑誌への掲載を続けたのではないかと考えられるのである。

新渡戸が雑誌による青少年教育を続けたもう一つの理由は、明治に入ってから教育の内容への不安及び不満であるうと考えられる。

新渡戸は『武士道』において

「我が国に於ては一八七一年（明治四年）廃藩置県の詔勅が武士道の甲鐘を報ずる信号であつた。その五年後公布せられし廃刀令は、『代価なくして得る人生の恩寵、低廉なる国防、男らしき情操と英雄的

なる事業の保姆』たりし旧時代を鳴り送って、『詭弁家、経済家、計算家』の新時代を鳴り迎へた。』（全集一卷一三六頁）

と、武士の徳や武士の誇りが消え行くことを憂いている。しかも、武士道に代るべき倫理感、価値観が見出されていないままに、世の中は、功利主義者及び唯物主義者の損得哲学にとって代わられつつある状況に大きな危惧の念を抱いていた。<sup>③</sup>このことは新渡戸の実感として次のように語られている。

「明治十年前後僕が学校盛りの時分には日本の国は、教訓に就ては（道徳とは言はぬ）沙漠の時代であつた。僕の十年代の時を顧みると、……有為なる人物を育てるやうには、心掛けた人が沢山あつたが、正しい人間を造らうと言ふ事には……之れを形に顕して自ら之れを個人に及ぼす事の甚だ少い時代であつた。……時代の要求は少しは悪い奴でも役に立つ人才を要する傾向があつたから、教育上道徳觀念を養ふ者は殆どなかつた。」（全集七巻六〇七頁）

時代を問わず世のエリート<sup>④</sup>の価値観や行動規範は民衆にも大きく影響を及ぼしていく。武士階級が存在していた時代には、武士が幼時より徹底した鍛錬と修行を繰り返して身に付けた、武士としての倫理観や行動規範が民衆の間にも徐々にその生き方の手本として浸透していった。武士の消滅は武士道の消滅でもあつたから、本来ならば武士階級に代わる新しい階級、即ち明治のエリート達<sup>⑤</sup>が武士道に勝るとも劣らない倫理観や行動規範を身に付けるべきであつた。しかし、武士道に代わる確固とした価値観を確立することも無いままに損得勘定に走ったエリート達の姿は、新渡戸にとって切実に危惧すべき問題であつたのである。

『人生読本』に明治維新後五十年間の教育の成果に対する酷評ともいふべき新渡戸の痛烈な文章がある。

「五十年の教育がどれ程我々の標準を高めたか、我輩は大いに疑問を抱いてゐる。知識の標準を高めた点に就ては一点の疑も抱かぬけれども、我々の人生に対する判断或は我々人間としての責任に関する

判断に就ては、我々の標準を大いに高めたとは受け難い。……五十年間の教育制度の効果は、精神的方面に就いては失敗ではなかつたらうか。我輩は慥かに失敗であつたと思ふ」（全集十巻二二八頁—二二九頁）

明治初期に多くの英雄が出たのは前時代の教育の成果であつて、明治の教育を受けた者で維新前の人物を凌ぐ人材が出てゐるか、出てゐないではないか、と新渡戸の当時の教育に対する酷評は続く。江戸時代の教育を受けた明治初期の英雄と、その五十年後の青年とを比較し、「私なき心」<sup>⑥</sup>即ち無私の精神の教育の欠如に新渡戸は大きな危機感を抱く。武士階級の滅亡に伴い武士を律していた厳しい倫理感、その倫理観を象徴する「無私」の精神の消滅への危惧を既に『武士道』において表明していた新渡戸にとって、明治の教育の結果は「失敗であるべき筈であると思ふ。」（全集十巻二二九頁）と、当然の帰結として受け止めている。

このような、徳育にむける当時の欠陥を補うために、また同時に、西洋から新しい文化が流入している状況で、西洋文化の基礎ともなり底流ともなっている古代ギリシア・ローマの古典やキリスト教という、新しい思想、新しい価値観を取り入れた、武士道に代わる新しい大和魂 The Soul of Japan を確立し次の世代に伝えていかなければ、我が国の徳育はその指針を失い、混乱の渦の中に放り込まれてしまうという、かなり切羽詰まつた危機感から、雑誌への投稿を続けたと考えられるのである。新渡戸は「武士道」なきあとの倫理的混乱への解決策として、「平民道」<sup>⑦</sup>という言葉を使用している。この平民道の確立のためにも勤労青少年を中心とした幅広い層を対象に多くの文章を発表し続けたと言ふことができるであらう。

さて、新渡戸の著書がベストセラーとなつた第一の理由は、平易で通俗的な文章であつたからであらうということは既に述べたが、平易で理解しやすい文章を書くだけでは、多くの読者の心を捉えることはできない。新渡戸の文章には当時の青年達にとっては非常に新鮮な西

洋の新知識や思想が多く紹介されていたから、そのような内容に多くの青年が引かれたことは事実であろう。しかし、単なる新知識、新思想の紹介であつたとしたならば、一冊の本が一四八版も重ねるロングセラーになつたとは考えにくい。新渡戸の文章にはその内容はもちろんのこと、当時の庶民階級の人々を中心に幅広い人々に受け入れられやすい何らかの手法があつたのではないかと考えられるのである。その手法のヒントが、新渡戸の修養書に数多く登場する和歌、特に道歌と呼ばれるジャンルに属する和歌にあるのではないかと考えられる。

新渡戸の著作にはどの書にも和歌が登場するが、特に修養書には多く登場する。『二日一言』に至つては四百首以上の和歌が掲載されている。これらの和歌を調べてみると、花鳥風月を詠んだ歌や恋の歌は少数派であり、登場する歌のほとんどは道歌に含まれる歌である。この道歌について見ていくことで、新渡戸の手法を明らかにしていきたい。

## 二

ここで、先ず道歌とはいかなる歌であるのか、見ておきたい。

『和歌大辞典』（明治書院、一九八六年）によれば、道歌とは

「道徳・教訓などを主たる内容とする和歌。教訓和歌とほぼ同義だが、現在では道歌の方が熟している。」

とある。三宅守常氏「石門心学における道歌の展開と庶民倫理」<sup>⑦</sup>によれば、道歌とは和歌の一種であり、

「人が思索し行為し行動する上でのさまざまなことなみの中で、その精神生活の中で何らかの倫理道徳、つまり行為規範を説示し、教訓的内容を内包する修身和歌」<sup>⑧</sup>

である。また、木野主計氏「往来物より見たる道歌」<sup>⑨</sup>によれば、

「道歌とは日常的に使う言葉をもつて和歌となし、……社会で人が生きて行くための具体的な行為規範を和歌に託したもの」<sup>⑩</sup>

である。これら道歌の定義を総合すると、道歌とは短歌形式を踏む教

訓的、倫理的意味内容を持つ歌といふことができる。

現代の我々の日常生活に道歌はほとんど登場しないが、明治時代には道歌集も数多く出版され、『道歌大観』<sup>⑪</sup>も刊行されている。人々の日常会話や学校等での訓示などにおそらく頻出したものと思われ、多くの人々がかなりの数の道歌を諳んじていたと考えられる。おそらく新渡戸も道歌をよく諳んじていたであろうし、日常の会話にも使用していたであろう。

明治の人々にとって道歌は、誰もが知っているなじみ深い歌であつたようだが、道歌普及の背景には、石門心学の道話の存在が大きい。従つて、道歌普及の大きな原動力ともなつた石門心学について、ここで簡単に触れておきたい。

道歌を多用して一般民衆の倫理面での教化に大きな功績を残したのは、石田梅岩（一六八五—一七四四）を祖とする石門心学一派である。源了圓氏「江戸後期における儒教と仏教との交渉」<sup>⑫</sup>によれば

「石門心学は石田梅岩によつて創始された民衆自身の手による思想運動・宗教運動・教化運動であり、……この運動の進展の過程で、この運動が最も活発で魅力に富む時期においては、神・儒・仏の三教一致ということが唱えられていた。儒教と仏教とは、神道をも含めて心の場で一致するという考えが支持されていたのである」<sup>⑬</sup>

さらに源氏は続けて、

「朱子学に立脚しつつ仏教を許容し、三教の一致を説くという考えが出たのはこの石門心学独自のことである。……思想の構造という点に注目すれば、……神・儒・仏の三教一致の立場をとる思想が生まれる可能性は十分にあり得たのである。しかしそれは歴史的には初めての出来事であつた。……このことには庶民の生活のレヴェルにおける長い間の三教一致の歴史が暗々裡にここでも働いたといえよう」<sup>⑭</sup>

と述べている。石門心学の教えは神・儒・仏の三教一致による庶民教化の運動であつたと同時に、庶民の側にも心学の教えとして三教一致

という考え方を受け入れる素地が準備されていたということが窺われる。

石門心学の教化の主たる対象は、石田梅岩の時代は商人であった。梅岩の後継者である手島堵庵（一七一八—一七八六）もその教化の中心は商人であったが、教化の対象を徐々に拡大していき、彼の活躍によって「心学運動は関西一円に拡がった」<sup>15)</sup>のである。堵庵の後、中沢道二（一七二五—一八〇三）により心学は全盛期を迎える。

「彼は心学を江戸に拡め、さらに全国に普及し、商人の世界だけでなく武士や農民の世界にも熱烈な支持者を見出して、心学全盛の時代をつくった人である」<sup>16)</sup>。

道二の講話は教養ある武士たちや藩主クラスの人々をも引きつけるほどの魅力があり、多くの武家屋敷に講話に招かれ、心学の最盛期をつくりあげている。

江戸後期において人々の中に深く根をおろした石門心学の教えは、新渡戸の活躍した明治期の人々の中にも深く浸透していたことであろう。この石門心学が人々の間にいかに普及・浸透していたかを示す例として、松平定信（一七五八—一八二九）と心学との関わりが挙げられる。時の老中であつた松平定信はひろく武士・庶民の教化のために心学を奨励し、武士・庶民といった身分の違いを問わず、誰もが気軽に心学者の講話を聴講できる旨公示したほどである<sup>17)</sup>。また、定信は士・庶一般に心学を普及させるにとどまらず、寛政二（一七九〇）年に創設した人足寄場での囚人に対する心学教化も実施している。定信は寄場の囚人達の更生・精神教化のために心学講和を導入し、人足教諭方として心学者をその任に当てたのである<sup>18)</sup>。幕末に石川島人足寄場見廻与力として人足寄場に関わつた原胤昭（一八五三—一九四二）は、当时人足寄場教諭方であつた菊池冬斎<sup>20)</sup>の主催する心学講舎、自謙舎の隣に生家があつたことから、その著書『出獄人保護』に次のように記している。

「自謙舎は余が生家の北隣に位し、月に六回一六の日を以て道話を爲

し其講日には毎會七八十人の老若男女の會するを常とせり。余は幼時心學を聴くを好み、常に兄姉と連れ立ちて、垣根越しに立聞きするを例とせり」<sup>21)</sup>。

石川謙『石門心学史の研究』によれば、幕末は心学講舎も激減し心学も衰退の一途を辿つていったようであるから、その聴講者の人数も興隆期にははるかに及ばなかつたであろう。しかしながら、右記の引用を見る限りにおいては、社会教育・生涯教育の場として心学講舎が民衆の間で日常的なものとして定着しており、心学が民衆の間に深く浸透していた様子をうかがうことはできよう。

石門心学の教えが江戸後期には武士・庶民の区別なく人々の間に広く深く浸透していたこと。石田梅岩以来、江戸時代だけで約一五〇種類の心学書が刊行されたこと<sup>22)</sup>。明治期に入つてからも江戸期の心学書が刊行され続け、特に中沢道二以来使用された「道話」（心学講和や心学の教えが記されたものを「道話」と呼ぶようになり、以後「道話」が一般化する）という名称を冠する書籍が多数出版されていること。これらの状況を見ると、「幕末期より明治期にかけて、心学は庶民の日常道徳、さらに国民道徳の代名詞として弘通するほどになった」<sup>23)</sup>と言うことができるであろう。このことは即ち、新渡戸が対象とした読者も、たとえ当時の新知識を授ける中等教育・高等教育を受けることのできない層ではあつても、すでに前時代からの心学の教えは国民全体の共通理解として持つていたであろうと考えられるのである。当時の心学はまさしく「人道を根基とせる平民道徳」<sup>24)</sup>だったからである。

### 三

以上のような心学の普及状況を念頭に置けば、新渡戸が通俗的文章を書くときに、その読者層に最も適した形として心学道話の手法を手にしたと考えることも可能なのではないか、そして、心学道話の手法を下敷きとして文章を構成していくうえで、心学道話の普及、特に

民衆教化に大きな役割を果たした方法である「道歌」に着目したのではないかと考えられるのである。

道歌には、道話の内容を聴衆に対してより鮮明に印象付ける役割、道話で説明した内容を聴衆が納得し肚におさめる手助けをする役割、そして、何度も口に出しているうちに自然と身体で覚え、道話を直接聞かなかつた周囲の人々にも歌とその中味が伝えられていくという役割があつた。<sup>25</sup> 道話に道歌を挿入するという心学者の手法は、道話の内容を伝えるうえで非常にすぐれた手法であり、道歌を民衆教化の教材として考えた場合、道歌は老若男女を問わず、また学問の有無や身分の相違を問わずに、端的にその言いたいところを伝えることが可能ならぬれた教材であつたといふことができるであろう。道歌の教材としての優秀性については、おそらく新渡戸も同時代の人間としてよく認識していたであろう。それ故にこそ、新渡戸はその著書、とりわけ修養書において夥しい数の道歌を使用したのではないかと考えられるのである。

心学の普及度から見て、おそらく明治の人々は口伝で多くの道歌を諳んじていたであろう。また種々の形で道話に接する機会も多かったであろう。このような、多くの庶民に馴染みのある心学者の手法を取り入れた文章は、当時の読者に一種の安心感を与えたのではないか。また、聞いたことのない新しい思想や宗教の話が登場したとしても、道歌に托されることで拒否感や拒絶感が柔らげられ、新渡戸の言わんとするところを自分達の持つている価値観に照らし合わせて（たとえ何となくではあつたにせよ）理解することが可能となつたのではないかと。そしてまた新渡戸もこれらの点について期待したのではなかつたかと推察することができる。

新渡戸の著書にはあらゆる箇所短歌が載せられているが、本稿では「道歌」の視点から新渡戸の選んだ歌と作品を論ずるために、「実業之日本」誌に掲載された文章をまとめて刊行した作品、『修養』『世渡りの書』『自警』の三冊に登場する和歌に限定して見ていくこととする。

『人生読本』は新渡戸の文章が掲載されているが、新渡戸の没後編集・刊行されたという経緯から、新渡戸自身の意志が反映されていないため本稿では検討の対象から外すこととする。また修養書の続篇ともいうべき『一日一言』については、そこに登場する和歌の数が膨大であるため、歌の検討の対象としては本稿から外し今後の課題として別稿に譲る。

新渡戸の三冊の修養書に登場する和歌について、それらが道歌のジャンルに含まれるのかどうか、先ず検討してみたい。前述した三宅氏の論文によれば、道歌には

「(一)道歌として明瞭に理解できる歌

(二)本来、道歌ではないが、道歌の意味に転用解釈して借用した歌」の二種類がある。石門心学の道話には多くの道歌が登場するが、その大多数は(一)に含まれ、(二)に含まれる歌も登場するが、大半は(一)に分類される歌である。(一)に分類される歌は、さらに、古来先人より歌い継がれてきており、もはやいつの時代に誰が作つたのか全く不明となっている作者未詳の歌と、禅僧等によつて意図的に教訓が込められた教訓歌、そして心学者たちが創作した歌に分類されよう。いずれにせよ、心学道話において登場する和歌は(一)(二)を合わせてすべて道歌として使用されている。

新渡戸の使用した歌は三つの修養書の歌をまとめると、一一七首(重複している歌、新渡戸自作の歌二首を除く)である。新渡戸の選んだ歌も(一)に分類される道歌と(二)に分類される道歌と、二種類存在する。特に(一)に分類される歌には、石門心学者の手による道話に含まれる道歌が少なからず引用されている。たとえば新渡戸自身が『修養』において「広く世に知られた道歌」(全集七卷一八八頁)として紹介している歌に次のような歌がある。

事足れば足るに任せて事足らず足らで事足る身こそ安けれ

この道歌は『自警』にも「子供も知つて居る」(全集七巻六三四頁)歌として登場する。この歌を心学者の道話に探してみると、脇坂義堂『御代の恩澤』、虚白齋『目の前』に載っており、また道歌集『教訓古今道しるべ』にも収められている。この歌は作者未詳であり、水戸光國公家訓に「古歌」として引用されていることから、かなり昔から口伝で語り継がれてきた歌と考えられる。この古歌が心学道話では道歌として掲載され、新渡戸の『修養』にも道歌として紹介されている。このように(一)に分類される道歌には心学道話に含まれる歌があり、また教訓的和歌を集めた歌集に所収されている歌、主に禅僧の手になる教訓的和歌を集めた歌集に所収されている歌、そして、現在となつては、その歌が明治期に人口に膾炙した歌であつたかどうか不明ではあるが、おそらく古くから口伝で継承され広く人々の口に上つたであろう道歌が含まれている。

(二)に分類される歌は、新渡戸が道歌として使用したか否かを証明することは難しいが、その前後の文章との関係、その歌に含まれる意味内容から見て、本稿では道歌として捉えていきたい。たとえば、歌そのものを見る限りにおいて、教訓を含んだ歌というよりも作者の心情を詠んだ歌が、『世渡りの道』に二首登場する。

から衣たちぬふ人はあらなくに秋の夜さむとなりまさりつゝ

(全集八巻二二六頁)

いもがかどいで入る毎にはや行きてはや帰りこといひし人はも

(全集八巻二二六頁)

この二首はいずれも『加茂翁家集』に所収されており、加茂真淵が妻を喪つた後の心情を詠んだ歌であるが、新渡戸はこの歌を引用して、「我々は何物によらず、其居らなくなつた時、ミッスする程度によつて、其ものの価値を測り得るもの」(全集八巻二二四頁)であるから、「如

何なる仕事に従事しても、又如何なる境遇に居ても、ミッスされる人、即ち居らざれば不足に思はれる人、即ち居らねば困る人になつて、始めて一人前の仕事をするものといはれると思ふ。」(全集八巻二二七頁)という教訓論を展開している。新渡戸の文脈においては真淵の歌は完全に道歌として転用されているのである。

このように新渡戸が独自に道歌として転用解釈したと思われる歌も散見されるが、特に修養書においては「事足れば」のような、当時の人々であれば老も若きも世代を超えて誰でも知つていたであろう道歌が多彩に掲載されている。読者には、読みやすい文章、読み慣れた文章という印象を与えたことであろう。

さて、それでは新渡戸自身は道話を読んでいたのかどうかという疑問が生ずるが、新渡戸は『世渡りの道』において『鳩翁道話』<sup>32)</sup>からかなり長い話を要約して引用している。幼少の頃より道話を読んでいたのか、修養書を書くために道話を読んでいたのかは判然としないが、著書に引用する程に読み込んでいたことは確かである。土庶を問わず普及していた石門心学の教えであつたから、新渡戸が幼い頃から道話に触れていたという可能性も決して少なくないであろうと思われる。

#### 四

新渡戸が修養書三冊で取り上げた道歌が、当時の勤労青年達を含めた幅広い読者層によく知られていたのではないかと考える根拠として、また、新渡戸が石門心学者の手法でその文章を展開するために、心学者と同様道歌を効果的に使用したのではないかと考える根拠として、新渡戸がその文章に載せた歌が、心学道話にどの程度載せられているか、また、心学の普及に触発されて作られたと思われる道歌集や教訓和歌集にどの程度載せられているか、調べていきたい。

なお、本稿の目的は道歌の初出・出典や作者を明らかにすることにない。八大集所収の和歌以外は出典や作者を明示しない。作者

未詳の歌も含めて、その出典や作者についての探索は後日の課題とする。

本稿で参考とする文献は以下のとおりとする。

一、心学道話について

加藤咄堂監修『心学道話全集全六卷』<sup>33</sup>（『日本道話全集』忠誠堂、一九二八年の復刻版 心学道話全集刊行会、一九七八年 引用する場合、道全と記す）、宮本愚翁『愚翁道話（含、中村徳水校「石門心學初入手引書」）』（一九四一年）、『日本思想大系四二石門心學』（岩波書店、一九七一年）

二、道歌集、教訓和歌集について

小野弘度編『教訓古今道しるべ』（一八三〇年の復刻版、一九七五年）、守本恵観編『心學繪入道歌百首和解』（信行社、一八八六年）、『道歌百人一首麓枝折』<sup>34</sup>、大倉精神文化研究所編『道歌心の姿見』（一八四九年序刊の翻刻版、芙蓉書房出版、一九九八年）、大倉精神文化研究所編『道歌心のうつし画』（『道歌心の写真』一八二七年刊の翻刻版、芙蓉書房出版、二〇〇〇年）、久垣敏編『最明寺殿教訓百首』（中近堂、一八九三年）、保田光則編『訓誠和歌集』（一八二七年刊の復刻、抜粹版、一九二三年）<sup>35</sup>  
三、新渡戸の修養書の道歌は『修養』『世渡りの道』『自警』の順に、各書の掲載順に取り上げていく。

① かゝる時さこそ命の惜からめかねてなき身と思ひ捨てずば

『修養』（全集七卷二九頁）

『愚翁道話』（二二頁）

かゝる時さこそ命のおしからめかねてなき身と思ひ知らずば

『道歌百人一首麓枝折』

かゝるときさぞな命のをしからむ兼てなき身とおもひしらずば

（太田道灌）

『訓誠和歌集』  
かかる時さこそ命の惜からめかねてなき身と思ひ知らずば

（太田道灌）

② せぬ時の坐禅を人のしるならばなにか仏の道へだつらん  
『修養』（全集七卷三〇頁）

『道歌心のうつし画』

せぬときの坐禅を人のしるならばなにか仏の道へだつらむ  
（至道無難禅師）

③ 幾たびか思ひ定めて変るらん頼むまじきは我心なり  
『修養』（全集七卷八二頁―八三頁）

『道歌百人一首麓枝折』

幾たびかおもひ定て替るらむたのむまじきはこころなりけり  
（北条時頼）

④ 怠らず行かば千里の外も見ん牛の歩のよし遅くとも

『修養』（全集七卷八三頁）

「心学初入手引書」『愚翁道話』三九三頁）

怠らず行かば千里の果も見ん牛の歩行のよしおそくとも

『心學繪入道歌百首和解』

怠らず行かば千里の外を見ん牛の歩みのよし遅くとも



『訓誠和歌集』

怠らずゆかば千里のほかも見む牛のあゆみのよし遅くとも

(読人不知)

⑤末遂に海となるべき山水もしばし木の葉の下くぐるなり

『修養』(全集七卷一〇二頁)

奥田頼杖『心學道の話』<sup>36</sup>(道全一二三九頁)

ながれては海となるべき谷水もしばし木の葉の下くぐる也

『教訓古今道しるべ』

ゆく末は海となるべき山水もしばし木のはのしたくぐるなり

『訓誠和歌集』

すゑつひに海となるべき山水もしばし落葉の下くぐるなり

(ろあん)

⑥心をば心の仇と心得て心のなきを心とは知れ

『修養』(全集七卷一二六頁)

『道歌心のうつし画』

こゝろをは心のあだとこゝろえて心のなきを心とはしれ

⑦天生の足こそよこに月夜蟹心は清き水にこそすめ

『修養』(全集七卷一三二頁)

『道歌心のうつし画』

天生のあしこそよこに月夜蟹こゝろは清き水にこそすめ

(新庵壺斎)

⑧憎むとも憎み返すな憎まれて憎み憎まれはてしなれば

『修養』(全集七卷一八一頁)

『やしなひ草』<sup>37</sup>(道全一九九七頁)

にくみてもにくみかへすないつまでもにくみにくまれはてしなれば

『心學繪入道歌百首和解』

憎むともにくみ返すなにくまれて憎みにくまれ果しなれば

⑨事足れば足るに任せて事足らず足らずで事足る身こそ安けれ

『修養』(全集七卷一八八頁)

『自警』(全集七卷六三四頁)

『御代の恩澤』(道全四三三頁)

事足れば足るにまかせて事足らず足らずで事足る身こそ安けれ

虚白齋『雨やどり』<sup>38</sup>(道全五三四頁)

事足れば足るに任せてことたらず足らずで事足る身こそやすけれ

『目の前』(道全五七七頁、五七八頁)

事足れば足るに任かせて事たらず足らずで事たる身こそやすけれ

『教訓古今道しるべ』

足ることをたるにまかせてことたらずたりぬる身こそやすけれ

⑩恐ろしき愛宕鞍馬の天狗よりなほ恐ろしき里の小天狗

『修養』(全集七卷二〇三頁)

『心學道の話』（道全三三五頁）

おそろしき鞍馬愛宕の天狗より猶恐ろしき里の小天狗

⑪咲ざれば桜を人の折らましやさくららの仇はさくらなりけり

『修養』（全集七卷二二六頁）

『自警』（全集七卷五〇一頁）

『目の前』（道全五八二頁）

咲かざれば櫻は人の折らましや櫻の咎はさくらなりけり

注 『後拾遺和歌集』所収 源道濟作

⑫やま深くなにかいほりを結ぶべき心の中に身はかくれけり

『修養』（全集七卷二八八頁、三六八頁）

『世渡りの道』（全集八卷八頁）

『自警』（全集七卷五一頁、六三六頁）

『道歌心のうつし画』

山ふかく何か庵をむすふべき心の中に身はかくれける

（定円僧都）

注 『続古今和歌集』所収 定円僧都作

⑬植えて見よ花のそだたぬ里もなしこゝろからして身は賤しけれ

『修養』（全集七卷二九一頁）

脇坂義堂『銀のなる木の傳授』<sup>(39)</sup>（道全二五七頁）

うゑて見よ花のそだたぬ里もなし心からこそ身はいやしけれ

『御代の恩澤』（道全四四八頁）

うゑてみよ花の育たぬ里もなし心からこそ身は賤しけれ

『愚翁道話』（二二六頁）

植て見よ花のそだゝぬ里もなし心からして身はいやしけれ

『教訓古今道しるべ』

植えて見よ花のそだゝぬさともなし心からこそ身はいやしけれ

『心學繪入道歌百首和解』

植てみよ花のそだたぬ里もなし心からこそ身はいやしけれ

⑭折り得ても心ゆるすな山桜さそふ嵐のありもこそすれ

『修養』（全集七卷三〇三頁）

『訓誠和歌集』

折りえてもこころゆるすな山桜さそふ嵐のありもこそすれ

（佛國禪師）

⑮あしゝともよしともいかにいひはてんをりゝかはる人の心を

『修養』（全集七卷三二二頁）

『道歌百人一首麓枝折』

あしゝともよしともいかにいひはてむ折々かはる人の心を

（弘法大師）

『最明寺殿教訓百首』

悪しともよしともいかでいひはてんをりゝかはる人のこゝろを

『訓誠和歌集』

あしきともよきともいかが言ひはてん折折かはる人の心を

(読人しらず)

⑩道といふことばに迷ふことなけれあさゆふおのがなすわざと知れ

『修養』(全集七卷三四六頁)

中沢道二『道二翁道話』(道全二一九八頁、一三三二頁)

道といふ詞に迷ふことなけれ朝夕おのが爲す業と知れ

『愚翁道話』(一一三頁、一二五〇頁)

道と云ふ言葉に迷ふことなけれ朝夕己がなす業と知れ

『教訓古今道しるべ』

道といふことばに迷ふ事なけれ朝夕おのがなすわざとしれ

『心學繪入道歌百首和解』

道といふ言葉に迷ふことなけれ朝夕己がなす業としれ

『道歌心のうつし画』

道といふことばに迷ふことなけれ朝夕おのがなすわざとしれ

(至道無難禪師)

⑪うつすとは月も思はずうつるとは水も思はぬ広沢の池

『修養』(全集七卷三六五頁)

『世渡りの道』(全集八卷九頁、三四三頁)

『訓誠和歌集』

うつるとも月もおもはず移すとも水もおもはぬ廣澤のいけ

(よみ人しらず)

⑫笛ふかず太鼓たゝかず獅子舞のあとあしになる胸の安さよ

『世渡りの道』(全集八卷二一八頁)

『自警』(全集七卷五〇〇頁)

『道歌百人一首麗枝折』

笛ふかず太鼓たゝかず獅子まいのあと足になるむねの安さよ

(月海元昭)

⑬思へたゞ使ふも人の思ひ子を我思ひ子に思ひくらべて

『世渡りの道』(全集八卷二四九頁)

『心學道の話』(道全一〇四五頁)

こゝろせよ遣ふも人のおもひ子を我思ひ子に思ひくらべて

(吉川惟足)

『やしなひ草』(道全二〇〇〇頁)

おもひやれつかふも人のおもひ子よ我おもひ子におもひくらべて

『道二翁道話』(道全二二四六頁、二二六三頁)

心せよつかふも人の思ひ子を我思ひ子におもひくらべて

『愚翁道話』(二二三頁)

おもひやれ使ふも人のおもひ子よ我が思ひ子に思ひくらべて

『心學繪入道歌百首和解』

心せよ仕ふも人の思ひ子を吾思ひ子に思ひくらべて

『訓誠和歌集』

思へただ仕ふも人の思ひごよわが思ひごにおもひくらべて  
(吉川惟足)

②⑩箸取らば天地御代の御めぐみ父母や主人の恩を味はへ

『世渡りの道』(全集八卷三六三頁)

『やしなひ草』(道全二〇四二頁)

箸とらば天地御代の御恵父母や主人の恩を味はへ

『愚翁道話』(三二二頁)

箸採らば天地御代の御恵主君や親の恩を味ふ

②⑪炭薪米麦豆に至るまで賤山しづの汗を思へば

『世渡りの道』(全集八卷三六三頁)

石田梅岩『石田先生語録』[抄]<sup>④</sup> (日本思想大系42『石門心学』三七頁)

炭薪米大豆ムギニ至ルマデ下賤山賤ノアセト思へバ (石田梅岩)

『道二翁道話』(道全二二八七頁)

炭薪米麦豆にいたる迄賤山がつの汗と思へば

②⑫坐禅せば四条五条の橋の上行き来の人を深山木にして

『世渡りの道』(全集八卷三八四頁)

『自警』(全集七卷五一頁)

『道歌百人一首麓枝折』

坐禅せば四条五条のはしのうへゆきゝの人を深山木にして

一一

(大燈国師)

②⑬そめ色の山もなき世におのづから柳はみどり花はくれなる

『自警』(全集七卷四〇六頁)

「心学初入手引書」(『愚翁道話』三九三頁)

染出す人もなき世におのづから柳はみどり花はくれなる

②⑭人多き人の中にぞ人ぞなき人となれ人人となせ人

『自警』(全集七卷四一八頁)

布施松翁『松翁道話』(道全六〇三頁)

人多き人の中にも人ぞなき人になれ人人となせ人

『心學道の話』(道全八五九頁)

人多き人の中にも人ぞなき人となれ人人となせ人

『道二翁道話』(道全二二三四頁)

人多き人の中にも人ぞなき人になれ人人となせ人

「心学初入手引書」(『愚翁道話』三九四頁)

人おほき人の中にぞ人ぞなき人となせ人ひとゝなれひと

『教訓古今道しるべ』

人多し人の中にも人ぞなき人となれ人人となれ人

『訓誠和歌集』

人おほきひとの中にも人ぞなきひととなれ人ひととなせ人

(よみ人しらず)

②⑤ 人にまけ己にかちて我を立てず義理を立つるが男伊達なり

『自警』(全集七卷四二四頁)

『やしなひ草』(道全一九八八頁)

人にまけおのれにかちて我をたてず義理をたつるがをとこだてなり

②⑥ 負けて退く人を弱しと思ふなよ智恵の力の強き故なり

『自警』(全集七卷四三〇頁、五一七頁)

『松翁道話』(道全六八一頁)

負けてのく人を弱しと思ふなよ智恵の力のつよいゆゑ也

『やしなひ草』(道全一九九七頁、二〇二頁)

まけてのく人をよわしとおもふなよ知恵のちからのつよきゆゑなり

『心学初入手引書』(『愚翁道話』(三九三頁)

負けてのく人をよはしとおもふなよ知恵の力の強きゆゑなり

『教訓古今道しるべ』

まけてのく人をよはしと思ふなよちゑのちからの強き故なり

②⑦ 外よりは手もつけられぬ要害を内より破る栗のいがかな

『修養』(全集七卷四四九頁)

『道二翁道話』(道全二二六〇頁)

外からは手もさはられぬ要害を内からやぶる栗のいがかな

『愚翁道話』(三五五頁)

外からは手もさへられぬ要害を内からやぶる栗のいがかな

②⑧ 負けて勝つ智恵の力の強さにはたれも感心するぞ韓信

『自警』(全集七卷五二二頁)

『心学道の話』(道全九九〇頁)

負てかつ智恵の力の強さにはたれもかんしんするぞ韓信

②⑨ 負けて勝つ心を知れや首引きのかちたる人の仆るゝを見よ

『自警』(全集七卷五二二頁)

『心学初入手引書』(『愚翁道話』(三九三頁)

負けて勝つこゝろを知るや首引の勝たる人のたふるゝをみて

『教訓古今道しるべ』

負けてかつこころねしれよ首引はかちたる人の倒るゝを見て

③⑩ 我にかちみかたに勝ちて敵にかつこれを武将の三勝といふ

『自警』(全集七卷五二四頁)

『心学道の話』(道全九八八頁)

我にかち味方に勝ちて敵にかつ是を武将の三勝といふ

③⑪ 世の中が四尺五寸になりけり五尺のからだ置き所なし

『自警』(全集七卷五三九頁)

『鳩翁道話』(道全七九頁)

世の中を四尺五寸となしにけり五尺のからだ置き所なし

『心学道の話』（道全一〇九八頁）

世の中が二尺五寸に成りにけり五尺のからだ置所なく

『愚翁道話』（八四頁）

世の中が二尺五寸になりけり五尺の骸おき所なし

同右（二五四頁）

世の中が四尺五寸になりける五尺の骸置所なし

③② 遂に行く道とは兼て聞きしかど昨日今日とは思はざりけり

『自警』（全集七卷六〇九頁）

『訓誠和歌集』

遂にゆく道とはかねて聞しかど昨日今日とは思はざりしを

（在原業平）

注 『古今和歌集』所収 在原業平作

③③ もろこしの山のあなたに立つ雲はこゝに焚く火の煙なりけり

『自警』（全集七卷六六七頁）

山本指月『勸善小語』<sup>④③</sup>（道全一四七〇頁）

もろこしの山のあなたにたつ雲はこゝに焼火の煙なりけり

『道歌百人一首麓枝折』

もろこしの山のあなたに立雲はここにたく火のけむりなりけり

（檀林皇后）

## 五

新渡戸の三修養書に掲載されている道歌一一七首から、心学道話、道歌集（教訓和歌集を含む）に収められている歌を拾い上げて見ると、三首が該当する。筆者の参照した文献は、そのほとんどが明治期に入っても刊行され続けた道話や道歌集の、しかもごく一部にすぎない。中島・足立『社会徳育及教化の研究』によれば、石田梅岩の『都鄙問答』を筆頭に約一五〇種類の心学書、道歌集が刊行されている。筆者の参照した文献はこれらの一割にも満たない。この乏しい文献に三三首該当したということは、おそらく相当数の道歌が江戸時代の心学書に所収していると考えられるのではないか。

また、前掲した木野氏の論文「往来物より見たる道歌」によれば、江戸時代の寺子屋において使用された教科書ともいうべき往来物には、いろは歌や教訓歌として多くの道歌が取り上げられていた。しかも、これら江戸時代に使用されていた往来物は、明治五（一八七二）年の学制発布以来明治十九（一八八六）年の「教科用図書検定条例」公布<sup>④④</sup>まで、一〇年以上にわたり小学校の教科書として使用されていたという。これらの点から考えてみると、新渡戸の読者にとって、新渡戸の文章にちりばめられた道歌は、いずれも日常口ずさみ、あるいはどこかで聞いたことのある、非常に馴染み深い歌であったということができであろう。これら人々の間に深く浸透していた道歌を新しい視点から取り上げたところに、新渡戸の修養書の魅力があったのではないかと考えられるのである。

次に新渡戸が心学書の手法で道歌を駆使し、しかもそこに新しい意味を加えていったのではないかと考える根拠として、新渡戸の文章の構成と心学道話の構成を比較していきたいが、紙数が尽きたため、以下次号に譲ることとする。

## 注

本稿で引用した新渡戸の著作は『新渡戸稲造全集』（教文館、一九六九年）に拠る。引用箇所には本文中に全集と記し巻数と引用頁を示した。

- (1) 松下菊人「平和と共生の教育者・新渡戸稲造」（新渡戸稲造『修養』タナバナ教養文庫、二〇〇二年、所収）同『修養』五一六頁
- (2) 松隈俊子『新渡戸稲造』みず書房、一九六九年、二二三頁参照
- (3) 全集一卷、一三七頁参照
- (4) 同、一一九頁―一二四頁参照
- (5) 全集一〇巻、二三四頁参照
- (6) 全集五巻、二四頁―二五頁
- (7) 三宅守常「石門心学における道歌の展開と庶民倫理」（大倉精神研究所編『近世の精神生活』続群書類従完成会、一九九六年 所収）
- (8) 同、一〇一頁
- (9) 木野主計「往來物より見たる道歌」（『藝林』第四四巻第一号、一九九八年 所収）
- (10) 同、二八頁
- (11) 松尾茂編『道歌大観』光融館、一九二二年
- (12) 源了圓「江戸後期における儒教と仏教との交渉」（源了圓編『江戸後期の比較文化研究』ぺりかん社、一九九〇年 所収）
- (13) 同、二三九頁
- (14) 同前
- (15) 同、二四九頁
- (16) 同、二五二頁
- (17) 石川謙『石門心学史の研究』岩波書店、一九三八年 三二五頁参照
- (18) 同、一一六頁―一二七頁参照
- (19) 若木雅夫『更生保護の父原胤昭』大空社、一九九六年（渡辺書房、一九五一年発行の復刻本）一〇一―一七頁参照
- (20) 石川謙『石門心学史の研究』一〇五二頁参照。同書によれば、菊池冬齋（一八〇四―一八七三）は自謙舎第二世舎主。
- (21) 原胤昭『出獄人保護』四七六頁―四七七頁（『戦前期社会事業基本文献集23』日本図書センター、一九九五年 所収）

- (22) 中島力造・足立栗園『社會德育及教化の研究』隆文館、大正三（一九一四）年 三二七頁参照
- (23) 石川松太郎「教育史教育・研究と石門心学の教化思想」（今井淳・山本真功編『石門心学の思想』ぺりかん社、二〇〇六年 所収）四一四頁
- (24) 足立栗園編『近世德育心學史要』右文館、明治三十二（一八九九）年 二七頁
- (25) 三宅守常「石門心学と道歌」（大倉山夏季公開講座Ⅳ『大倉精神文化研究所』一九九四年 所収）三〇頁―三二頁参照
- (26) 三宅守常「石門心学における道歌の展開と庶民倫理」同、一二一頁
- (27) 寛政二（一七九〇）年刊行
- (28) 天明七（一七八七）年刊行
- (29) 『三省録』後編五
- (30) 柴田鳩翁『鳩翁道話』文政一〇（一八三九）年刊行
- (31) 全集八巻、二九二頁参照
- (32) この全集に収められている心学道話は以下のとおりである。  
「第一巻」鳩翁道話、銀のなる木の傳授、和合長久の傳授、開運出世の傳授、賣卜先生安樂傳授、賣卜先生精儀「第二巻」御代の恩澤、孝行になるの傳授、福相になるの傳授、長命になるの傳授、雨やどり、五用心慎草、目の前、松翁道話、道の銚「第三巻」心學道の話、鸚鵡問答「第四巻」ありべかゝり、民の繁榮、錢湯新話、勸善小話、爲學玉箒、身體柱立、男子女子前訓、夜話莊治「第五巻」立身始末鑑、道得問答、都鄙問答、齊家論、やしなひ草、石田先生事蹟「第六巻」道二翁道話、聖賢證語字解、案山子草、町人身體なをし、家道訓
- (33) この歌集と内容が酷似した歌集が翻刻版として出版されている。おそらく底本が異なるものと思われるが、こちらも参照した。禅文化研究所編集部編『道歌百人一首心の策』禅文化研究書、一九九八年
- (34) この復刻・抜粋版は、「はしがき」に後藤新平（一八五七―一九二九）が亡母の法要のために印刷・出版したものとする。原本は、この歌集を愛読していた母親が歌集を紛失して落胆していたため、後藤が母のために台湾在任中人をして写本を探し、明治三十九（一九〇六）年に完成したものであると記されている。この歌集の真贋のほどは定かではないが、後藤と共に台湾に赴任中の新渡戸にもこの歌集に触れる機会があったのではないかと考えて、ここに載せた。
- (35)

- (36) 天保十四（一八四三）年刊行
- (37) 『やしなひ草前編』編者不明、天明四（一七八四）年刊行
- (38) 天明六（一七八六）年刊行
- (39) 刊行年不明
- (40) 『道二翁道話六編』第一編は寛政六（一七九四）年刊行、逐次文政七（一八二四）年に及ぶ。
- (41) 安永八（一七七九）年に写本されたもの以外は不明
- (42) 『松翁道話五編』第一編は文化十一（一八一四）年刊行
- (43) 安永年間に刊行
- (44) 木野主計「往来物より見たる道歌」四頁―六頁、一五頁―一六頁参照